

先生のつうしんぼ

宮川ひろ作 小野かおる絵





子どもの文学

先生のつうしんぼ

NDC 913 偕成社 166p. 23cm 1976年

発行 1976年2月 1刷

1976年7月 9刷

著者 みや かわ 宮川ひろ

発行者 今村 廣

発行所 株式会社 偕成社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

電話 (03) 260-3221 (代) 〒162

振替 東京5-1352番

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8393-626080-0904

Printed in Japan © 宮川ひろ 小野かおる 1976

先生のつうしんぼ

宮川ひろ



●はじめに

“つうしんぼなんか、
なければいいんだ。”

そうおもったことはありませんか。

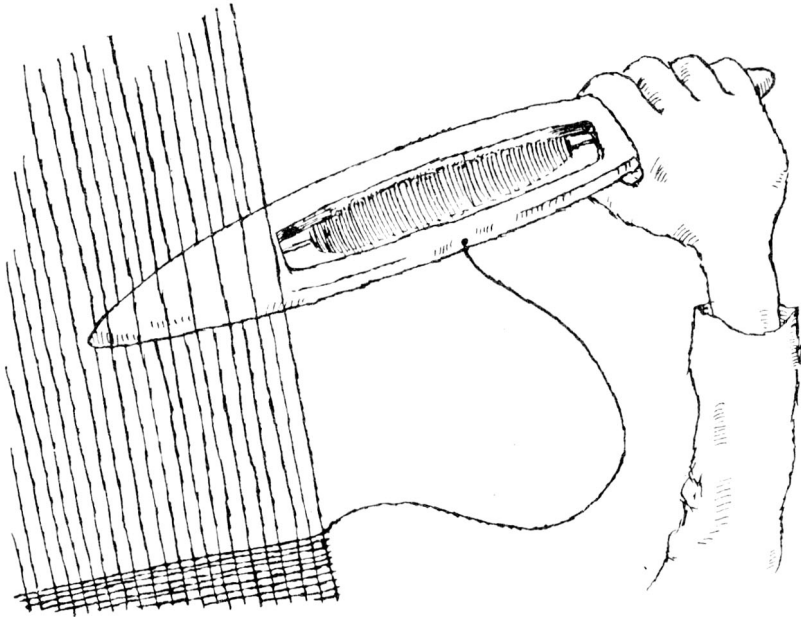
そんなときには、ほんたいに、

先生のつうしんぼを、つけてみたら、

どうだろう。

でも、あんまりきびしいことはしないでね、

お手やわらかに、たのみますよ。

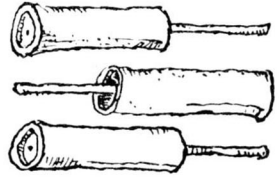




先生のつうしんぼ／もくじ

1	もうすごし	8
2	先生の顔 <small>かお</small>	24
3	パチンコとライスカレー	38
4	おかいこさん	48
5	じゃがいも七こぶん	62
6	だっぴ	75
7	二まわり半 <small>ふたはん</small>	97
8	子ども祭り <small>まつ</small>	116
9	夏休みとかけて <small>なつやす</small>	130
10	はたの音 <small>おと</small>	150
	あとがき	166





作者・宮川 ひろ

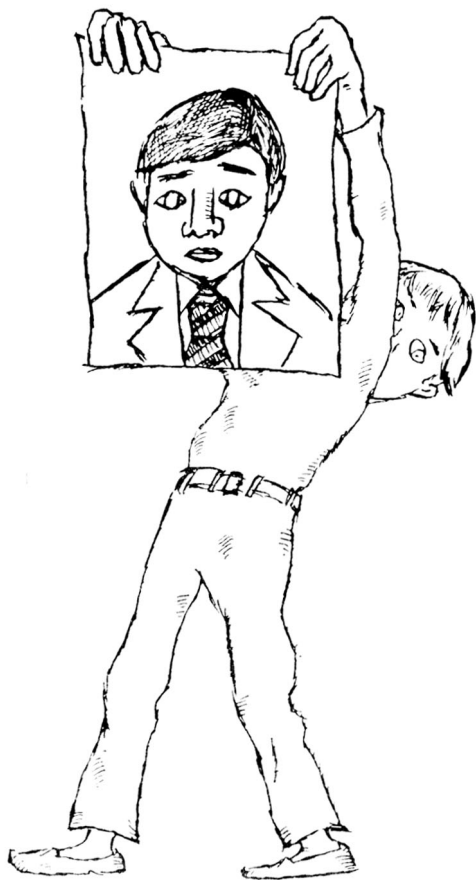
群馬県に生まれる。金華学園卒業後、小学校に勤めた。新日本童話教室、びわの実学校に学ぶ。日本児童文学者協会会員。著書、『春駒のうた』『るすばん先生』『りんごひろいきょうそう』『木のぼり公園』『アーコも転校生』『先生のけっこん式』『四年三組のはた』など。住所／東京都板橋区赤塚新町 2-13-20

画家・小野かおる

東京に生まれる。東京芸術大学洋画科卒業。小さいころから「コドモノクニ」などに童画を発表、現在絵本・さし絵などで活躍。児童出版美術家連盟会員。主な作品に『しっぽをなくしたねずみさん』『ももいろのひよこ』『その旗をまもれ』『木のぼり公園』などがある。住所／東京都杉並区阿佐谷北 2-32-4

先生のつうしんぼ

宮川ひろ



1 もうすこし

給食のおかずは、のこさず食べましょう——。

そうきめたのは、先週の学級会のときです。

「三年一組は、食べのこし、学校一よ。」

給食のおばさんに、へんなことで一ばんといわれて、みんなで考えてきめたのでした。

一、二年と受けもたれた八木先生は、すききらいに、きびしい先生でした。きれいに食べてしまうまでは、席を立ててくれなかったほどです。

それが、三年になって、古谷先生にかわってからまもなくでした。

「先生、にんじん、のこしてもいいですか？」



すききらいのおおい田中伸たなかしんいち一が、さぐるようにきいたのです。

「う、まあな。」

古谷先生ふるやはあいまいなへんじをして、首くびをたてにふりました。

「え？ のこしてもいいの？」

がまんして、いっしょうけんめい食たべていたものが、びっくりして立ちあがりました。

「先生、ほんと？」

「ほんとですか？」

何回なんかいもねんをおしました。

「あ。」

先生はまた、みじかいへんじをしました。

三年一組くみのさんばんがふえていったのは、この日からです。

「いくら先生が、いいっていったからって、やっぱり、すききらいはいけないわよ。学校一なんていわれて、はずかしいったらありゃあしない。」

この日がたまたま当番で、給食のおばさんに、ひにくをいわれてきたのは、藤井文子です。はらをたてて、ぼんぼんといいました。

「一ばん？ いいじゃあないかよう。」

伸一は立ちあがって、かたをいからせていきました。

にんじんも、大きなあぶら肉も、のこしていいことになってから、伸一は、学校へくるのが、どれほど気らくになったかしれません。

それを、三年一組のはじだからなんて、もとへもどされたのでは、たまらないとおもったからです。

「そうだよ。」

「そうよ、そうよ。」

すききらい組の、良夫と咲子も、そこで伸一といっしょになって、がんばりました。

「そんなら、学級会で、よくはなしあいましょう。」

文子がつうんとよこをむいていうと、

「ああ、それでいいですよ。」

伸しんいち一いちも、いせいよくいきました。伸しんいち一いちと文ふみこ子は席せきがとなりどうしです。そのうしろの席せきで、吾ごろう郎ろうと玲れいこ子は、はらはらしながら、ふたりを見ていました。

学がつきゅうかい級かい会かいは、毎まいしゅうどうび週じゅう土ど曜よう日びの四じ時かん間かんめときまっています。

この日ぎちようの議ぎ長ちようは、ク拉斯いじん委員いんの浅あさかわけいこ川かわ啓けい子こでした。

まっていたように手をあげて、いちばんさきに意見いけんをだしたのは伸しんいち一いちです。

「いやいや食たべても、えいようにはならないとおもいます。」

「あぶら肉にくとにんじんだけが、いい食たべものとはいえないんじやあないですか。やさいも肉にくも、ほかにたくさんあるんですから、わたし、とり肉にくなら食たべられるんです。」

つづいてそういったのは、咲さきこ子こでした。

なかよしの伸しんいち一いちのために、松まつきごろう木き吾ご郎ろうだつて、なにかいってやりたいとおもいました。

でも、学がつきゅうかい級かい会かいで意いけん見けんをいうとなると、つきまいったようなことばになって、

「やっぱり、いまのうちに、なんでも食たべられるようにしておくほうが、いいとおもい

ます。」

なんて、いい子ぶったことしか、いえませんでした。

「いーだ、おまえなんか、きらいなものをのみこむ気持ちなんて、わからないんだよ。」
伸一しんいちがうしろをむいて、あごをつきだすと、吾郎ごろうはすまなくなつて、首くびをちぢめてみせました。

そして、学級会がっきゅうかいは、「のこさず食べましょう」にきまつて、おわりになつたのです。

そのあいだ、古谷先生ふるやは、なんの意見いけんもださずに、おもしろそうな顔かおをして、きいていただけでした。

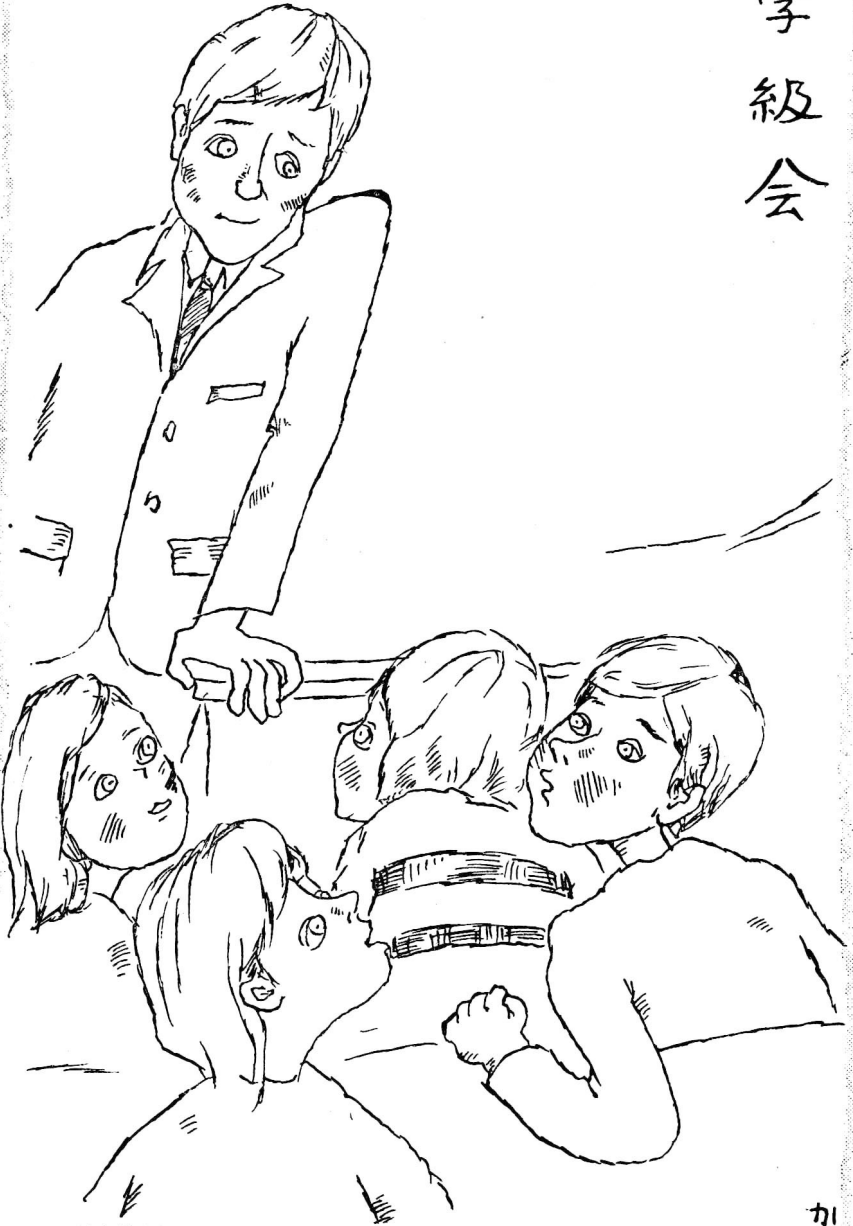
「みんなできめたことは、まもるんだぞ。」

あんまり力ちからのはいっていかない声で、そういいました。

それから、十日とおかぐらいすぎでからです。この日の給食きゅうしょくは、にんじんのたくさんはいつたカレーでした。

給食きゅうしょくは、四人ずつむきあつて食べます。伸一しんいちはさつきから、そのにんじんをもてあ

学級会



ましていました。

「鼻をつまんで、のみこむのよ。」

文子が、しきりにせわをやいています。吾郎はもう食べおわっていました。ふと、先生の口もとへ、目がいききました。

先生は、スプーンにのせたにんじんを、いま口に入れるところでした。入れたとおもったら、ポケットからちり紙をだして、左手で口をふきました。

どうも、そのふきかたが、おかしいのです。ばかにていねいでした。ふいたちり紙は、左のポケットにしまいました。

そして、またにんじんを口に入れました。入れたとおもったら、またあたらしいちり紙をだして、ていねいにふきました。そしてまた、左のポケットにしまいました。

あっ、吾郎はおもわず、声をあげそうになりました。

先生は、口をふいたのではなくて、いちど口に入れたにんじんを、ちり紙のなかへはきだしては、ポケットにしまっているようです。

吾郎は、じぶんがわるいことでもしたように、顔を赤くして、あわでて目をふせました。だれかに気づかれてはいないかと、そうっと、あたりを見わたしました。

みんな食たべることにむちゆうで、先生を見ていた人はいなかったようです。ほっとしたら、なんだかおかしくなって、ひとりで、にやっとわらってしまいました。

おい、見ろよ——すぐにでもおなじ班はんの三人にはなしたかったのに、やっとながまんしてこらえました。

ばらしたら、先生がかわいそうだともおもいました。それよりも、そんなひみつは、じぶんだけでしまっておきたいとおもったのです。

でも、ただだまっているだけでは、おもしろくありません。そうだ、先生のつうしんぼをつけてやろう……吾郎はそうおもいました。つうしんぼをつけるまえに、まず手紙てがみをあげることにしました。

先生、にんじんきらいなんでしょ。ぼく、きょう見ちゃったんだ。